慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	屋名池誠教授履歴と回顧業績目録
Sub Title	Biographical resume & list of publication of Professor Makoto Yanaike
Author	屋名池, 誠(Yanaike, Makoto)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.1 (2022. 12) ,p.[i]- xiv
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	屋名池誠教授退任記念論文集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230001--005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

屋名池誠教授
履歴と回顧　業績目録

履歴と回顧

1957年8月7日　東京都墨田区で出生。

父 勇は町工場勤務の旋盤の熟練工、母 静江は結婚まで洋裁店勤務で、幼いころは母手作りの服をよく着せてもらった。父方の祖母 トミ、5歳年下の妹 順子とともに5人家族の温かい家庭で幸せな子供時代を送った。

1965年4月　墨田区立隅田第二小学校（現在は旧隅田小学校と統合して隅田小学校）入学。

1970年4月　墨田区立鐘ヶ淵中学校（現在は向島中学校と統合して桜堤中学校）入学。

社会科の名授業で知られた杉浦文子先生と出会う。

塾に通うこともなく、のんびり中学生活を楽しんでおり、高校は近隣の都立高を志望していたが、3年次の12月のはじめ杉浦先生に東京学芸大学附属高等学校受験を勧められ、翌年1月初旬の受験日まで、都立高にはなかった受験科目の社会と理科を急遽1か月猛勉強した。

1973年4月　東京学芸大学附属高等学校入学。

のんきな下町の中学校から、何の予備知識もないまま、当時東大進学率全国一、二を争っていた超進学校の、それも中学からの内部進学者が4分の3を占めるという中に急に放り込まれてしまい、大変なカルチャーショックを受けた。

1976年3月　東京学芸大学附属高等学校卒業。

卒業に先立って論文（課題「私は進学して何を学ぶか」）、面接を経てリクルートスカラーシップ（のち財団法人江副育英会　現 公益財団法人江副記念リクルート財団）の予約奨学生に採用され、学部生時代の4年間給与奨学金を受けた。東京大学教育学部を卒業しながら実業界に進んだ故江副浩正氏の教育に対する初志を具現化した事業で、裕福でない家庭の出身として大いに恩恵を受けた。ここに記して感謝とともに江副氏への紙碑とさせていただきたい。

1976 年 4 月　東京大学文科三類入学。

3 年次からの専門課程への進学に当たり、興味は多岐にわたっていたが、時枝誠記『国語学原論』、ソシュール『一般言語学講義』に出会い、国語学（日本語学）に志望を定める。

1978 年 4 月　文学部国語学専修課程に進学。

築島裕教授（平安訓点語）、山口明穂助教授（中世文語）、教養学部から出講の古田東朔教授（近代語）に師事。

1 学年先輩の金水敏氏（現在 大阪大学名誉教授・日本学士院会員）とは学部・大学院を通じて毎日のように議論を戦わせ、楽しく有意義な学生生活を送った。

教育実習は国語科ではなく社会科を選び、中学時代の恩師杉浦先生のもとで大いにしごかれた。現在の私の授業のやりかたにいくらかでもとりえがあれば、それは杉浦先生の賜物である。

1980 年 3 月　文学部国語学専修課程卒業。

1980 年 4 月　大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程 進学。

現代日本語の文法を専攻した。

1983 年 3 月　修士課程修了。

当時は博士課程進学を考えるものは、修士論文に 3 年をかけるのが慣習であった。

当時はまた、博士課程に進学できればほとんど確実に研究職に着きうるという牧歌的時代であったので、博士課程合格を待って、中学時代の同級生でその後再会して 7 年間交際していた吉田照美と結婚し、その後 2 人の娘に恵まれた。

1983 年 4 月　博士課程進学。

現代日本語の構文論（統語論）を研究していたが、形態論的な確実な基礎をもたないまま構文論の議論がおこなわれていることに疑問を感じ、形態論研究にも注力し始める。また、言語研究は理論（理論による一般化）・言語史（時間軸での検証）・方言研究（空間軸での検証）の三者が一体となって有機的におこなわれなければならないと考えるようになり、時代・方言にかかわらず適用可能な動詞の活用の新たな記述方法を考案した。

1985 年 3 月　博士課程中退。

1985 年 4 月　昭和女子大学文学部日本文学科専任講師に着任。

研究日 1 日を除き、毎日 8 時半から 17 時（土曜は 13 時）までの勤務で、出退勤はタイムカードで記録、クラス担任としてクラス全学生・全科目の成績処理、クラスの任務であった毎日の掃除の監督などなど、厳しい勤務環境であったが、同僚や、勤勉で活発な学生諸君に恵まれ、充実した毎日であった。

研究室が同室であった茅場康雄氏（平安文学専攻・現 昭和女子大学名誉教授）には、現在まで、研究の萌芽的な構想段階でまず批評していただくことが続いている。

また、同僚の方言学の故飯豊毅一先生には学生引率の方言調査に同行させていただき、はじめて本格的な方言調査の実際を学ぶことができたのはありがたかった。

このころ、動詞・形容詞活用の際、アクセントも複雑に変化する日本語では、述部形態の記述にアクセントも加えなければならないということに想到し、苦手であったアクセントの聞き取りを練習するとともに、現代東京方言、現代大阪方言の動詞のアクセント面での語形変化（アクセント活用）のシンプルな記述方法を考案した。

1989 年 4 月　大阪女子大学（大阪府立。のち、大阪府立大学、さらに大阪市立大学と合併して、現在 大阪公立大学）学芸学部国文学科専任講師に着任。

日本語の研究者としては一度は古典語の祖地であった関西に住んでみたいという年来の志望をかなえたものであった。

こじんまりした大学で学生数も少なかったが、戦前からの名門校で、学生諸姉はおとなしいがまじめで優秀であった。

授業負担は少なかったが毎日登校し、同期に助手として赴任した前田広幸氏（言語学・現 奈良教育大学教授）と連日のように専門的な議論をする充実の日々であった。

平安時代声点資料の調査に基づき、当時のアクセント体系案を考案し、それによってはじめて当時の動詞・形容詞のアクセント活用の網羅的記述を行った。

また、大阪女子大学所蔵の初期英学資料の共同研究を行い、日本語史における幕末・明治初期の重要性に目を開かれる。研究成果は研究図録として出版した（日本英学史学会 豊田実賞受賞）。

1992 年 4 月　東京女子大学現代文化学部言語文化学科助教授に着任。

明るく積極的で優秀な学生諸姉相手の授業は楽しく、多くの刺激を受けた。

英語と日本語を結び、英語教育、外国人に対する日本語教育、翻訳研究、日英語対照研究を主軸とする珍しいコンセプトの学科で、英語系の同僚からも新たな刺激を受けた。

東京女子大学にお呼びくださった故 進藤咲子先生は近代日本語研究の専門家で、職場をご一緒したのはご停年までの 1 年間だけだが、その後ご逝去までながらく、近代語について種々ご教示に預かった。

翌年、進藤先生の後任として、方言学の佐藤亮一先生を招聘した。佐藤先生は第一線の方言学の研究者で、私も文部省科学研究費特定領域研究「環太平洋の『消滅に瀕した言語』に関する緊急調査研究」に加えていただき、多くの方言研究者に知己を得ることができた。先生には昨年の御逝去までながきにわたり親昵させていただき、多くの学恩を蒙った。

縦書きから横書きへという書字方向の変化はきわめて稀な世界史的事件で、近代日本語の一大変化といえるのに、本格的な研究が行われていないことから書字方向の歴史の調査を開始し、資料調査に全国の所蔵機関を巡りはじめる（1998 年度から国の科学研究費受給）。

文献以外の資料や植民地の資料までを扱うことで、従来の近代語研究の視野の狭隘を乗り越えることと、自動車全体を総体として史的発展を見るのも重要だが、エンジンならエンジン、ギア機構ならギア機構にもそれぞれ独自の展開の歴史があるように、言語史においても、ある言語的なメカニズムだけをモジュール的に取り出すことでその史的展開の合理性を追求できるという新たな言語史観を提示し、ソシュール的な言語史観墨守から抜け出すことを目指していた書字方向研究にめどがついたのち、2008 年度から新たに科学研究費を得て、日本語の形態音韻論的現象のうち最も重要な動詞・形容詞の活用・アクセント活用について、すでに考案していた記述方法の検証と拡張をおこなうとともに活用・アクセント活用現象の本質・来し方・将来に迫るために全国臨地調査を開始した。この調査は現在も継続中で、2022 年段階で 30 箇所の調査を終えているが、今後なお数地点の調査を予定している。調査結果とその分析は個別には発表しておらず、調査終了を待って全体的な考察とともに一書にまとめて刊行の予定である。

2001 年 4 月　東京女子大学現代文化学部教授に昇格。

書字方向史の研究を取りまとめ、出版した。

2005 年 4 月　東京女子大学現代文化学部教務委員長（2008 年 3 月の退職まで）

このころから、日本語の表記システムの体系的な記述理論の構築を目指して、種々の表記機構の調査・研究を開始した。

折から起きた学部学科改組の動き（その後、学部統合、言語文化学科廃止）に反対している中で、慶応から招聘を受け転任を決意した。

2008 年 4 月　慶応義塾大学文学部人文社会学科国文学専攻教授に着任。

学生諸氏の優秀さは予想通りであり、ここでも授業から多くの刺激を受けた。

慶応国文学専攻スタッフの書誌学・文献学への造詣とその学究的姿勢に刺激を受け、表記の調査・研究を歴史的方面に大きく広げることになった。また、これまで別個におこなってきた形態音韻論的研究と表記研究が有機的に結びつき、新たな次元の研究領域が拓けるようになった。こちらの方面の研究は逐次、論文として発表している。

2009 年 7 月　日本語学会編集委員（2012 年 5 月まで）

2010 年 4 月　慶応義塾大学大学院文学研究科委員となる。

2011 年 10 月　慶応義塾大学通信教育部学習指導主任･文学部代表学務委員（2013 年 9 月まで）

2012 年 4 月　日本語学会評議員（現在に至る）

2016 年 6 月　日本語学会常任査読委員（2020 年 5 月まで）

2023 年 3 月　慶応義塾大学文学部停年退職予定。

常に人の扱わないオリジナルなテーマを、自分なりのオリジナルな方法で研究してきたと自負していたが、こうして来し方を振り返ってみて、実に多くの方々との出会いの中で自分の学問が育てられてきたことが実感された。恩師、先輩のみならず、どの勤務先でも、優秀で勤勉な学生諸子に恵まれ授業や課外活動を通して多くの刺激を受けてきた。

この回顧は、教職についてからも、自分が、同僚、学生諸子に恵まれたおかげで稀有の幸福な学究生活を送れていたのだということを気づかせてもらえる機会になった。そうした生活を送れたのももちろん家庭の安定あればこそである。家族にも感謝しなければならない。

幸福な退職を迎えるに当たって、この多くのみなさまに心より感謝申し上げる。

非常勤講師としての出講先（五十音順。学部と大学院とを兼ねる場合は、大学院名は省略）
青山学院大学文学部、大阪大学文学部（集中講義）、大妻女子大学文学部・短期大学部、お茶の水女子大学文教育学部、九州大学文学部（集中講義）、慶応義塾大学文学部（専任就任前）、神戸大学文学部（集中講義）、昭和女子大学人間文化学部（専任離任後）、成蹊大学文学部、鶴見大学文学部、東京大学文学部、東京外国語大学、東京女子大学現代文化学部（のち現代教養学部。専任離任後）、東京都立大学人文学部、日本大学文理学部、日本女子大学文学部、放送大学大学院

業績目録

書評、学会展望、紹介、対談、インタビュー、座談会、
一般向け講演、放送、展覧会監修は省略

[著 書]

〈単著〉

『横書き登場 —— 日本語表記の近代』岩波書店（岩波新書） 2003年11月

〈共著〉

『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選』（共著）大阪女子大学附属図書館 1991 年 3 月（分担：本文 39-82 ページ・図版 34-56 ページ）

『上方の文化 上方ことばの今昔』(共著)和泉書院 1992 年 6 月（分担:1-59 ページ）

『国語国文学研究の成立』（共著）放送大学振興協会 2007 年 4 月（分担：197-223 ページ）（改訂増補版 2011 年 4 月）

『日本語の風景 —— 文字はどのように書かれてきたのか』（共著）専修大学出版局（分担：195-239 ページ）2015 年 4 月

[論 文]（単なる書評・学会展望にとどまらない書評論文・学界展望論文は含む）

「現代東京語文法の基礎的研究」修士論文（東京大学）1982 年 12 月

「述部構造 —— 現代東京方言述部の形態＝構文論的記述 ——」『松村明教授古稀記念 国語研究論集』（明治書院）583-601 ページ 1986 年 10 月

「活用 —— 現代東京方言述部の形態＝構文論的記述［２］——」『學苑』（昭和女子大学近代文化研究所）565 号 194-208 ページ 1987 年 1 月

「述部のアクセント —— 現代東京方言述部の形態＝構文論的記述［３］——」『學苑』573 号 91-106 ページ 1987 年 9 月

「語 —— 現代東京方言述部の形態＝構文論的記述［４］——」『學苑』577 号 199-20 ページ 1988 年 1 月

「述部のアクセント・第２ —— 現代日本語諸方言による記述方法の検証と拡張

――（1）」『學苑』578 号 97-110 ページ 1988 年 2 月
「活用・再論 ―― 現代東京方言述部の形態＝構文論的記述［2］・補遺 ――」『學苑』579 号 79-91 ページ 1988 年 3 月
「『活用論』 ―― 現代東京方言述部の形態＝構文論的記述［2］・補遺 2 ――（1）～（3）」『學苑』585・588・591 号　1988 年 9 月・11 月・1989 年 2 月
「＜ライマン氏の連濁論＞ 原論文とその著者について」『百舌鳥国文』（大阪女子大学）11 号 63-94 ページ 1991 年 11 月
「母音脱落 ―― 日本語上代中央方言資料による形態音韻論的分析 ――」『女子大文学 国文篇』（大阪女子大学）43 号 1-41 ページ 1992 年 3 月
「ある連音忌避」『国語研究』（明治書院）83-104 ページ 1993 年 10 月
「『音便形』 ―― その記述」『築島裕博士古稀記念 国語学論集』（汲古書院）1107-1130 ページ 1995 年 10 月
「数詞のアクセント ―― 現代東京方言のばあい ――」『東京大学国語研究室創設百年記念 国語研究論集』（汲古書院）1214-1234 ページ 1998 年 2 月
「日・英慣用表現の対照研究 第 2 部 日本語における身体語彙感情表現」（上野田鶴子・眞田雅子と共著）『東京女子大学比較文化研究所紀要』60 巻 35-106 ページ 1999 年 1 月
「釘貫亨著『古代日本語の形態変化』」（書評論文）『国語学』（国語学会）51 巻 1 号 116-124 ページ 2000 年 6 月
「漱石の書き入れから＜縦書き・横書きの日本語史 1>」『図書』（岩波書店）627 号 48-52 ページ 2001 年 7 月
「横書き以前＜縦書き・横書きの日本語史 2>」『図書』（岩波書店）628 号 46-49 ページ 2001 年 8 月
「右横書きの誕生＜縦書き・横書きの日本語史 3>」『図書』（岩波書店）629 号 54-58 ページ 2001 年 9 月
「左横書きのライバルたち＜縦書き・横書きの日本語史 4>」『図書』（岩波書店）630 号 54-58 ページ 2001 年 10 月
「左横書き登場＜縦書き・横書きの日本語史 5>」『図書』（岩波書店）631 号 50-55 ページ 2001 年 11 月
「縦書き 対 横書き（一）＜縦書き・横書きの日本語史 6>」『図書』（岩波書店）632 号 54-59 ページ 2001 年 12 月

「縦書き 対 横書き（二）＜縦書き・横書きの日本語史 7>」『図書』（岩波書店）633 号 56-59 ページ 2002 年 1 月

「ある過渡期＜縦書き・横書きの日本語史 8>」『図書』（岩波書店）634 号 46-49 ページ 2002 年 2 月

「右か左か（一）＜縦書き・横書きの日本語史 9>」『図書』（岩波書店）635 号 48-52 ページ 2002 年 3 月

「右か左か（二）＜縦書き・横書きの日本語史 10>」『図書』（岩波書店）636 号 54-58 ページ 2002 年 4 月

「左横書きへ＜縦書き・横書きの日本語史 11>」『図書』（岩波書店）637 号 50-54 ページ 2002 年 5 月

「「普通」の書字方向＜縦書き・横書きの日本語史 12>」『図書』（岩波書店）638 号 52-57 ページ 2002 年 6 月

「縦書きの奇妙な世界＜縦書き・横書きの日本語史 13>」『図書』（岩波書店）639 号 50-57 ページ 2002 年 7 月

「書字方向とは＜縦書き・横書きの日本語史 14>」『図書』（岩波書店）640 号 50-56 ページ 2002 年 8 月

「奈良田・秋山郷・隠岐五箇方言の音声・音韻」　『消滅する方言音韻の緊急調査研究』（科学研究費補助金特定領域研究（A）(2)「環太平洋の『消滅に瀕した言語』にかんする緊急調査研究」研究成果報告書） 119-165 ページ 2002 年 12 月

「横書きの成立 ── 日本語表記のエポック ── 」『東京女子大学比較文化研究所紀要』64 巻 23-40 ページ 2003 年 1 月

「地域差・世代差・ことばの正しさ」『新「ことば」シリーズ 17　言葉の「正しさ」とは何か』（国立国語研究所）38-48 ページ 2004 年 3 月

「読むためのデザイン ── 文字の機能と明治・大正の新聞・雑誌 ── 」『d/SIGN』8 号 88-91 ページ 2004 年 7 月

「平安時代京都方言のアクセント活用」『音声研究』（日本音声学会）8 巻 2 号 46-57 ページ 2004 年 8 月

「明治語の表記」『近代日本語研究』（『日本語学』23 巻 12 号）64-72 ページ 2004 年 9 月

「文字のかたち」『学際』（構造計画研究所）14 号 79-84 ページ 2005 年 2 月

「文字の向きは何を伝えていたか ── 江戸切絵図の場合」『国文学 解釈と教材の研究』50 巻 5 号 78-88 ページ 2005 年 5 月

「現代日本語の字音語読みとりの機構を論じ、「漢字音の一元化」に及ぶ」『築島裕博士傘寿記念 国語学論集』（汲古書院）670-692 ページ 2005 年 10 月

「活用の捉え方」日本語教育学会編『新版 日本語教育事典』（大修館書店）71-77 ページ 2005 年 10 月

「活用とアクセント」日本語教育学会編『新版 日本語教育事典』（大修館書店）78-80 ページ 2005 年 10 月

「絵巻の時空構成を書字方向から考える」『別冊国文学 左右 / みぎひだり』（学燈社）60-75 ページ 2006 年 2 月

「縦書きはなぜ下から上へは書かないか」『Qfinity の広場』（NEC）2006 年 7 月

「横書きの戦中・戦後 ── 地域・ジャンルでどうちがったか ── 」『国語論究 第 13 集 昭和前期日本語の問題点』（明治書院）109-142 ページ 2007 年 9 月

「2006 年･2007 年における日本語学界の展望　文字･表記（理論･現代）」（展望論文）『日本語の研究』（日本語学会）4 巻 4 号 70-76 ページ 2008 年 10 月

「現代日本語の音・訓読み分けの機構を論じ、「漢語・和語形態素の相補的分布」に及ぶ」『藝文研究』（慶應義塾大学藝文学会）96 号 75-95 ページ 2009 年 6 月

「有元光彦著『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』」（書評論文）『日本語の研究』（日本語学会）5 巻 3 号 132-138 ページ 2009 年 7 月

「「総ルビ」の時代 ── 日本語表記の十九世紀 ── 」『文学』（岩波書店）10 巻 6 号 117-130 ページ 2009 年 11 月

「奈良時代東国方言の音韻体系と防人歌の筆録者」『古典語研究の焦点』（武蔵野書院）1-26 ページ 2010 年 1 月

「「標準語」の時代から「共通語」の時代へ」『三色旗』（慶応義塾大学通信教育部）752 号 3-8 ページ 2010 年 11 月

「「近世通行仮名表記」 ── 「濫れた表記」の冤を雪ぐ」『近世語研究のパースペクティブ』（笠間書院）153-181 ページ 2011 年 5 月

「上代東国方言の形態変化と東歌の筆録者」『藝文研究』（慶應義塾大学藝文学会）100 号 1-37 ページ 2011 年 6 月

「語彙と文法論」『これからの語彙論』（ひつじ書房）97-112 ページ 2011 年 12 月

「仮名はなぜ清濁を書き分けなかったのか」『藝文研究』（慶應義塾大学藝文学会）101 号 22-62 ページ 2011 年 12 月

「書字方向の存在意義を文字の本質から考える」『日本語学』32 巻 5 号 192-203 ページ 2013 年 4 月

「中世末期日本語の〈語〉と〈語表記〉── 天草版平家物語前半の分かち書きから」『藝文研究』（慶應義塾大学藝文学会）106 号 170-192 ページ 2014 年 6 月

「文字の表音性」『話し言葉と書き言葉の接点』（ひつじ書房）137-168 ページ 2014 年 9 月

「重力下の縦書きと幻の皇国書式」『ことばと文字』3 号 125-133 ページ・4 号 148-160 ページ（日本のローマ字社）2015 年 2 月・9 月

「人麻呂歌集の表記機構」『藝文研究』（慶應義塾大学藝文学会）109 号第 1 分冊 284-332 ページ 2015 年 12 月

「「記憶言語」と人麻呂歌集の読解機構（上）」『藝文研究』（慶應義塾大学藝文学会）110 号 1-24 ページ 2016 年 6 月

「文字を書き・読むとはどういうことか」『文』（くもん出版）112 号 5-7 ページ 2016 年 7 月

「表記論から「二文字併用社会」の必要性を考える―「動詞の自・他部分に送り仮名のない複合語の表記」の読み分け機構を中心に―」『国際化時代の日本語を考える ── 二表記社会への展望』くろしお出版 201-234 ページ 2017 年 4 月

「「ありえたもう一つの道」から明治以来の送り仮名法の性格を考える」『日本語学』36 巻 12 号 70-83 ページ 2017 年 11 月

「かなづかい前夜の仮名表記 ── 「中・近世通行仮名表記」のはじまり ── 」『藝文研究』（慶應義塾大学藝文学会）113 号 144-191 ページ 2017 年 12 月

「忘れられた分かち書き方式 ── その再評価」『ことばと文字』10 号（日本のローマ字社）114-122 ページ 2018 年 10 月

「漢文の蔭の日本語表記 ── 続日本紀宣命の逆順〈語〉表記 ── 」『沖森卓也教授退職記念論集 歴史言語学の射程』三省堂 75-117 ページ 2018 年 11 月

「続日本紀の「宣命書き」システム」『藝文研究』（慶應義塾大学藝文学会）114 号 18-44 ページ 2019 年 12 月

「〈和語漢字〉と〈漢語漢字〉 ── 現代日本語漢字の機能的区分の提案」『ことば

と文字』15 号（日本のローマ字社）81-90 ページ 2022 年 4 月

「ヲコト点、仮名、無表記―『西大寺本金光明最勝王経』訓点の表記システム」『藝文研究』（慶應義塾大学藝文学会）123 号第 1 分冊 1-20 ページ 2022 年 12 月

［口頭発表］（論文化されていないもの）

「日本語のアスペクト体系二、三」国語学会秋季大会（富山大学）1983 年 10 月

「日本語の横書き ── 過去・現在・未来」（シンポジウム「非生命体の進化理論」）［招待パネル講演］日本進化学会（東京大学）2004 年 8 月

「平面図形としての文字 ── 方向性を中心に」（シンポジウム「視覚化することば」）［招待パネル講演］東京大学国語国文学会 2004 年 11 月

「動詞のアクセント活用」［招待講演］日本音声学会第 311 回研究例会（高知大学）2005 年 6 月

「日本語のアクセント活用 ── 諸方言から日本語の歴史へ ── 」［招待講演］大阪大学大学院文学研究科公開講演会 2005 年 9 月

「動詞活用の地域差とその成因・今後の進路 ── 理論と『方言文法全国地図』の出会うところ ──（シンポジウム「『方言文法全国地図』の完結をめぐって」）［招待パネル講演］日本方言研究会第 83 回研究発表会（岡山大学）2006 年 11 月

「歴史的仮名遣いの 20 世紀」（シンポジウム「日本語の 20 世紀」）［招待パネル講演］日本語学会 2007 年度春季大会（関西大学）2007 年 5 月

「文字の『第二次元』」［招待講演］大阪大学国語国文学会・国語語彙史研究会・表記研究会共催公開講演会 2007 年 8 月

「われわれはなぜ容易に漢字を読みわけられるのか」慶應義塾大学国文学研究会 2008 年 7 月

「可読性をきわめる ── 鈴鹿本『今昔物語』の合理的表記システム」慶應義塾大学国文学研究会 2015 年 7 月

「上代の音声・音韻入門」［招待講演］上代文学会夏季セミナー（「『上代の言葉と文学』入門」）（早稲田大学）2016 年 8 月

「万葉歌は文法要素をどのように表記してきたか」慶應義塾大学国文学研究会 2022 年 12 月